

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



(福岡県教育委員会編「福岡県の史跡」から転載)

太宰府の文化財

⑥1

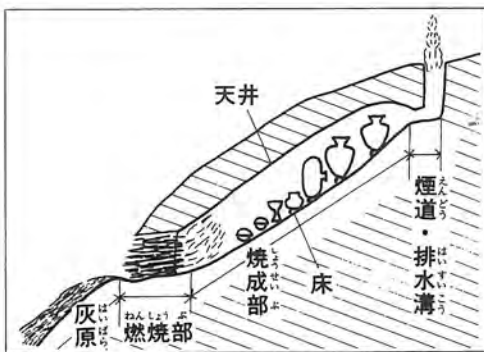
国分瓦窯跡(国指定史跡)

間口一・五メートル 高さ一・五メートル 奥行五・五メートル

筑前国分寺跡の北東、国分ヶ丘区の北にある新池の岸辺に数基の瓦窯跡があります。しかし残念ながら現在は、池の水が浸水するため、窯の入口を埋めて保存しているので見ることができません。このような状態の窯跡ですが、大正十年の調査では次のようなことがわかりました。

窯は丘陵の斜面を利用した登窯(左図参照)で、中は日干しレンガをアーチ状に積み上げています。ここで焼いた瓦は、鴻臚館式や老司式と呼ばれる様式の瓦で、同じ様式の瓦は、国分寺跡以外にも大宰府政庁跡や観世音寺でも出土しています。これらのことから、国分瓦窯は八世紀の窯で、国分寺の屋根を葺くための瓦を焼いたものと考えられています。

太宰府では、ここ以外にも政庁西側の来木や松倉などの丘陵に、瓦窯跡が点々と見つかっています。



登窯図の説明

上図は須恵器の窯の断面図です。瓦窯は、壺や皿ではなく瓦を焼いたというだけで、窯の構造は同じです。粘土で作った土器あるいは瓦を窯の中(焼成部)に並べ、焚き口(燃焼部)から火を燃やし、煙は斜面奥の煙出しの穴(煙道)から外へ出ていきました。失敗作は捨て場(灰原)に捨てられました。

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



太宰府の文化財 ⑥2

太宰府天満宮の力石 三個

(県指定有形民俗文化財)

天満宮の本殿の横を抜けて裏、つまり北神苑に出ると、右手の山陰の先に野見宿禰頭彰碑が建っています。その前に三個の楕円形の石が並べて置いてあります。それが力石です。

まず目につくのは、筆太な字でそれぞれ一字ずつ彫られた松、竹、梅の文字です。そして、その下にまた文字が読めます。それらを読むと次のような事が想像できます。嘉永七年(一八五四)、博多鰻町(現在の福岡市須崎)に着いた尾道の船頭たちが、博多の角力連や鰻町の若者連の世話で、この三個の力石を奉納しました。江戸時代

博多の町では角力が盛んで、力自慢に競って力石を持ちあげたという事です。この時も尾道と博多の力自慢たちが力競べをした後に、力石を奉納したのかもしれない。これらの石は一個百五十キログラム以上もあるそうです。

野見宿禰は相撲の祖とされ、また菅原家の先祖だともいわれられます。博多鰻町にあった船着き場も、今は埋められてしまい、昔の人々の暮らしの跡が消える中、この力石は江戸の庶民の風俗資料として大切なものです。



野見宿禰頭彰碑と力石

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



太宰府の文化財

63

木造観音菩薩立像

(重要文化財)

像高一六八センチメートル
クス材の一木造
平安時代後期
観世音寺蔵

観世音寺の仏様はそのほとんどが、火事の危険から守るため収蔵庫に安置されていますが、この観音様だけは現在、講堂の本尊として正面の講堂内に祀られています。穏やかな表情で、ちよつと腰をひねり、左手に蓮華を持ち、右手

を下ろして御簾の中に立っております。この像は「杵島観音」の名で呼ばれ、文武天皇の時、肥前国杵島の沖で漁師の網にかかって引き揚げられたという逸話が伝わっています。杵島というのは現在の武雄市と杵島郡にあたり、沖とは有明海のことだと思われます。中世末の作といわれる伽藍絵図にも、漁

師が網をひく姿が描かれており、観音引き揚げの逸話を表したと想像されます。像の体内には「大仏師良俊 俊頼」などの名と、結縁の僧や人々の名前がしるされており、この像が造られた当初のものと思われるます。また、足の柄には江戸時代の元禄と安永年間に行った修理の記録も残っています。



市政だより

太宰府

NO. 456

平成29.1

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



直径七三・一咫 鑄銅製
桃山時代 太宰府天満宮蔵

太宰府の文化財 鶴亀文懸鏡 二面

64

(県指定有形文化財)

懸鏡は神前や仏堂内に掛ける鏡で、天満宮のこの一对の鏡は直径七十センチ以上の大きなものです。鏡背には写真のように中心に龜



形の紐を通すつまみがあり、その上方に嘴を接して向かいあった二羽の鶴を鑄出しています。他には各々に銘文が書かれ、次のようなことがわかります。

この懸鏡は文禄二年(一五九三)九月吉日に、大谷刑部少輔吉継とその家族が奉納したもので、作者は京都の鑄物師中嶋六郎左衛門尉です。

大谷吉継は豊後の人で、豊臣秀吉の小姓・奉行として活躍、秀吉の朝鮮出兵、いわゆる文禄・慶長

の役にも出陣しています。鏡が奉納された文禄二年は第一回の出兵の翌年にあたり、担当していた和平交渉、あるいは出陣して無事に帰国したと関係があるかもしれません。

この吉継も、七年後の関ヶ原の戦いでは、旧知石田三成の請により豊臣方につき、敗死してしまいます。戦国乱世に生き、四十年の短い生涯を終えた大谷吉継ゆかりの品として、この鏡はまた興味深いものがあります。

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



長さ33.0cm 幅27.0cm 厚さ6.5cm



一辺が23.5cmの正方形 厚さ6.0cm



二辺が24.0cm 対辺33.5cmの直角二等辺三角形 厚さ6.0cm

写真提供・九州歴史資料館

太宰府の文化財 65

文様埴

奈良時代

埴とは現在のレンガがあるいはタイルにあたるもので、建物の壁や床また基壇などに使われました。模様がない、いわゆる無文の形が一般的ですが、ここ太宰府では写真のような種類の文様埴が見つかっています。ご覧のように、文様は蓮華文、宝相華文、唐草文、水波文そして周囲の珠文など、太宰府地方独自の図柄ですが、朝鮮半島の新羅の文様の影響も否定できません。

出土地は主に大宰府政庁跡（都府楼跡）や学校院跡ですが、その出土状態は柱穴やただの穴、井戸などから発見されるので、文様埴本来の使われ方ははっきりしません。埴の中央に釘孔と思われる孔があいているものもあるので、それらは、壁面に取り付けたのでしようか。二次的な使い方では政庁西脇殿の階段の蹴上げ部分や、学校院跡で柱の礎板に転用されているものが見られます。

なお、太宰府天満宮所蔵の学校院跡出土と伝えられる文様埴（最上段の写真と同型）が重要文化財に指定されています。

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



太宰府の文化財 ⑥⑥

大宰府学校院跡

(国指定史跡)

秋の夜長は読書に最適ですが、奈良時代の学生たちも寸暇を惜しみ、足りない蔵書を工面しながら読書に勉強に励んでいたことでしょう。

大宰府跡(都府楼跡)と観世音寺にはさまれて、大宰府学校院跡があります。現在は草原に説明板が建つだけですが、かつては二百人もの学生が学ぶ府学校でした。

奈良、平安時代、中央には大学、地方諸国には国学という教育機関があり、律令体制を支える役人を養成していました。ここ大宰府にも府学校が置かれ、大宰府の各役所で働く役人たちを育てていました。

府学には三つのコースがあり、一つは一般行政マンになる学生、医学を学ぶ医学生、経理マンをめざす算生に分かれて学んでいました。

学生たちの出身地は筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後の六国で郡司など有力者の子弟です。

さて、学校院跡からは近年の調査により数棟の掘立柱建物が見つかっていますが、まだその詳しい規模はわかっていません。ただ前回取りあげた文様埴の多くがこの地区から出土していることなど考えると、それらで飾られた壮麗な建物の存在も想像できないでしょうか。

ところで、市立学業院中学校は、この学校院に因んで付けられた名です。

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府の文化財の

(67)

梵字文神鏡二面
(県指定有形民俗文化財)

直径約四五咫 鋳銅製
江戸時代 竈門神社蔵



宝満山の頂上と麗に鎮座する竈門神社の祭神は、玉依姫(宝満宮)神功皇后(聖母宮)、応神天皇(八幡宮)の三神です。その竈門神社に江戸時代に奉納された神鏡が数面残っています。

写真の二面もそのうちの一つで、ご覧のような銘文が陽鑄されています。

それによるとこの二面は寛永十八年(一六四一)、福岡藩第二代藩主黒田忠之が奉納したものです。

中心に書かれている記号のようなものは梵字、種字といい、インドの古い文字で、仏を表しています。聖母宮(写真上)の上は釈迦如来を表すバク、八幡宮の方は阿弥陀如来のキリクで、それぞれ本地垂迹説という本地仏なのです。つまり、例えば阿弥陀仏が人を救うために仮に神の姿をして現れたのが八幡神という考えです。

寛永十八年という年は、二月に大火があり、山中の諸堂が悉く灰

になるという大事件が起こっています。諸堂の再建は慶安元年(一六四八)まで遅れますが、鏡の銘文によると、これらの神鏡だけは大火の翌月三月には鑄造されています。なおこの当時は、三つの祭神それぞれの鏡が作られたようですが、玉依姫の宝満宮の鏡は嘉永六年(一八五三)に焼失し、他の二神の鏡だけが現存しているというわけです。



市政だより

太宰府

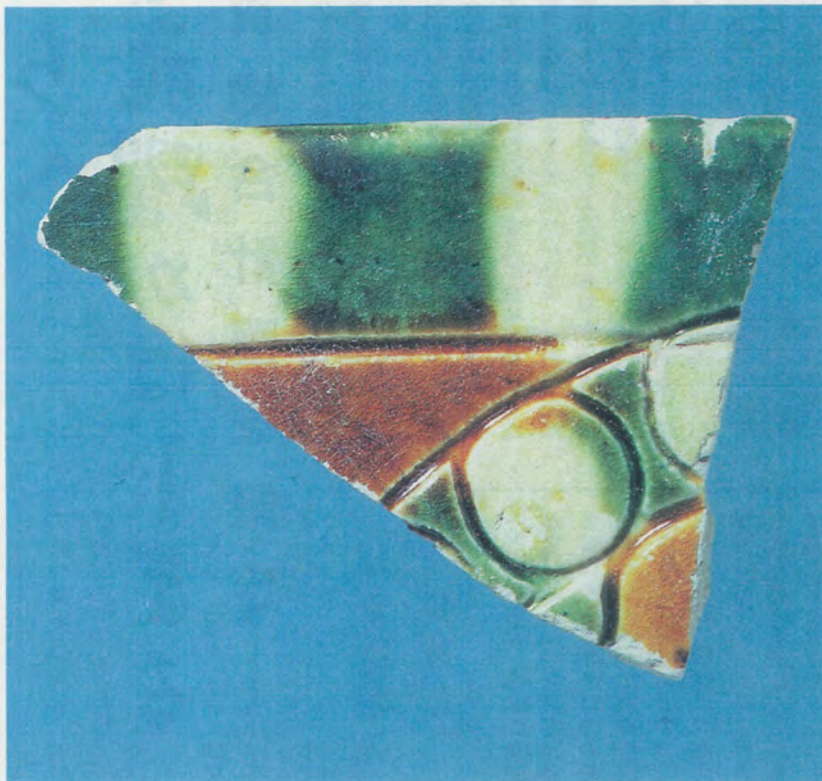
NO. 464

平成3 1.1

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



唐三彩鏡



唐三彩枕

緑や茶色で鮮やかに彩られた馬やラクダの置物をご覧になったことはありませんか。中国旅行の土産などによくあるものです。
唐三彩は名の如く、中国の唐代に作られ、白地に緑と褐色の釉ゆうによって三色に彩られた焼物です。
唐三彩についてはまだ不明なことが多いのですが、中

太宰府の文化財 ⑥8 唐三彩 唐代

心は唐代の八世紀初めから玄宗皇帝げんそうまでの三、四十年間で、地域は長安・洛陽周辺、その用途は墓に納める来世用の調度てうど―明器―が主だといわれています。
唐三彩は日本にも若干入って来たよう、奈良をはじめ全国十数カ所の遺跡で見つかっています。
太宰府でも写真のような小片が発掘され、一片（写真左上）は丸壺に足を付けた形の器―鏡の一部、他の一片（写真左下）は枕で、大変貴重なものです。
唐三彩は中国では主に明器として作られたらしいといいましたが、日本では寺院や役所跡から出土しており、明器というよりは祭事用だったのでないかと考えられています。太宰府の出土地の一つが観世音寺ということもこれに示唆を与えるものではないでしょうか。



唐三彩枕復原製作品

写真提供…九州歴史資料館

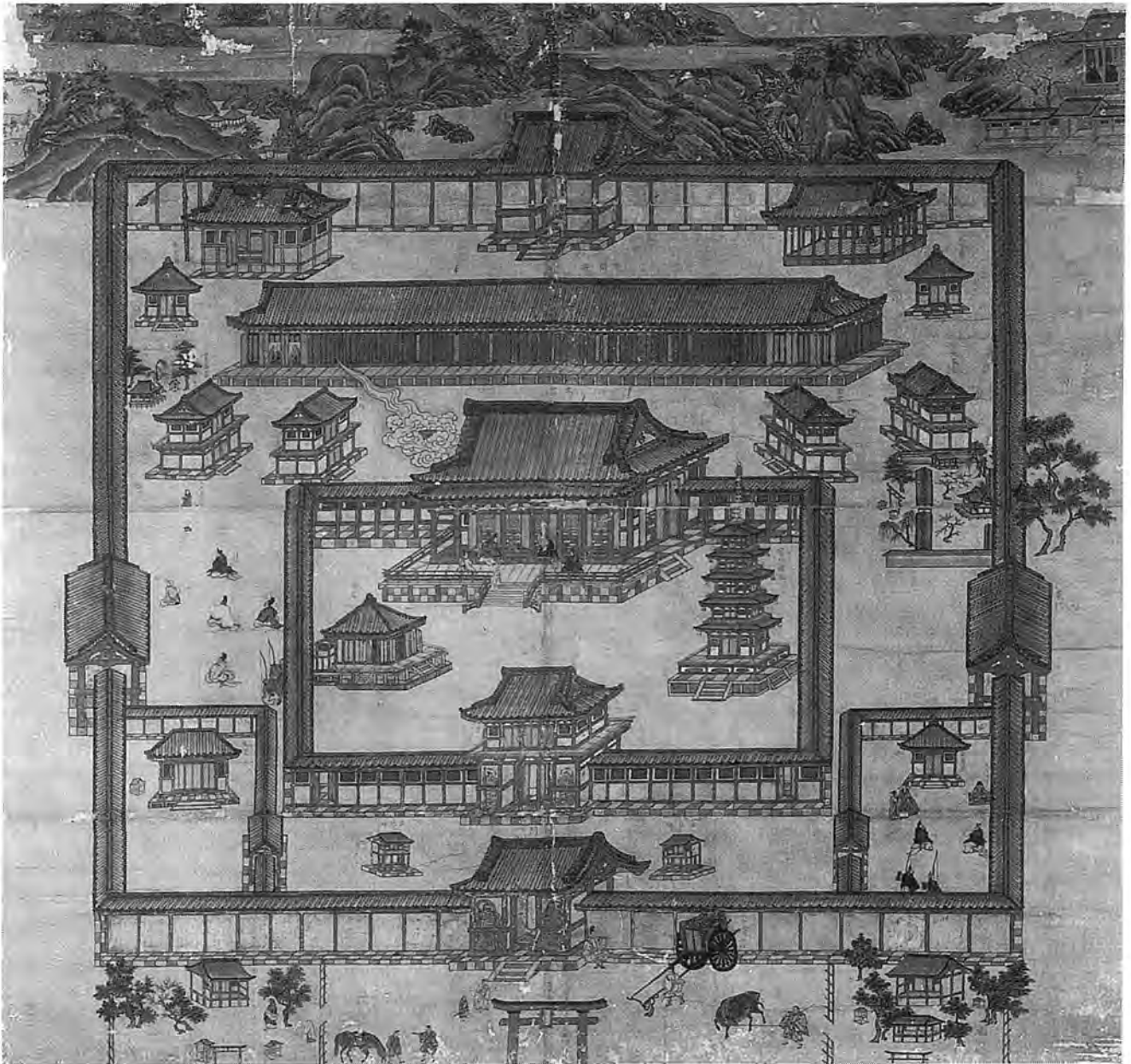


市政だより

太宰府

NO. 465
平成3
2.1

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



写真提供…九州歴史資料館

太宰府の 文化財 ⑥9

観世音寺絵図

紙本著色 縦一六五・二寸
横一六一・九寸 観世音寺蔵

観世音寺には、一幅の伽藍絵図が伝わっています。絵図には講堂や五重塔、それを囲む回廊、また東西に長大な僧房、そして大門や中門などの門も整って、昔の観世音寺の繁栄ぶりがしのべられます。

この絵図は、伽藍の建物だけでなく、よく見ると、束帯の人物や僧侶などがここに描かれ、また門の前には馬や牛車も見えます。人物像には所々、「天智天皇」や「伝教大師」、「大宰少弐」などの朱書があり、観世音寺に縁の深い人々が描かれていることがわかります。

また左上隅には、海岸で網を曳く数人の漁師が描かれ、これは「杵島観音」の伝説を表したものと考えられています(平成二年八月一日号参照)。

以上のように、この絵図は単なる伽藍図ではなく、観世音寺の縁起、つまり由来やいい伝えなども書き込んだ縁起絵図ということができるでしょう。この絵図は室町時代末の写しと伝えられ、古図を元にした盛時の境内の様子に、室町時代を反映して寺の縁起や参詣者の図像が描き加えられたのでしょうか。観音様の縁日などに、参詣の老若男女を前にこの絵図を掛け、寺の輝かしい由緒や靈験などの講話が行われていたのかもしれない。

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



太宰府の 文化財 ⑦〇

曲水の宴

三月第一日曜日

於太宰府天満宮

「きよくすいのえん」「ごくすいのえん」あるいは「めぐりみずのとよのあかり」などと呼ばれ、陰暦三月上旬巳の日(初の巳の日)。女兒を祝う節句、後は三月三日の上巳の節句に宮中や公卿の邸宅で行われた行事です。

参会者が曲水の流れのほとりに座り、上流から流される盃が自分の前を通り過ぎないうちに詩歌を詠んで、盃の酒を飲み、次へ盃を流していく遊びで、終わって別室で宴を設けて詩歌を披露するという風流の行事でした。

起源については諸説あるようですが、古代中国で河の水で禊をするという水辺の行事が遊宴化したものと考えられています。日本では、平安時代に盛んに行われました。

太宰府天満宮でも、平安時代の天徳二年(九五八)に大宰大貳小野好古が始めたと伝えられています。その後、いつのころから途絶えていましたが、昭和三十八年に復興され、今日まで続いています。